10/2/2013

日本・アジアのキリスト教――無教会キリスト教の系譜（1）

芦名定道

後期オリエンテーション

演習日（後期）：10/2, 9, 16, 23, 30, 11/6, 13, 20, 27, 12/4, 11, 18, 1/8, 15, 22

場所：８演

・10/2：後期オリエンテーション（本日）、担当者確定

・演習は 10/16 より開始。

・毎回担当者が、テキストの内容を説明し、問題提起し（テキスト外の資料などを合わせて用いる）、議論を行う。担当者はレジメを用意する。残った問題は宿題とする（次回の冒頭で報告する）。

・必要な解説を行う（芦名）。

・成績はゼミでの発表（少なくとも前期後期一回ずつ）によって評価する。

＜テキスト＞

・『内村鑑三選集２　非戦論』岩波書店。

＋α

・これまでの順番

渡部和隆

岡田勇督

長原尚子

小島千鶴

高崎和樹

山田奈緒美

齋藤伎璃子

田中吉隆

藤貫裕

森澤忠昭

山下毅

キリスト教史における無教会の意義（１）

一　はじめに

「「無教会」と云へば無政府とか虚無党とか云ふやうで何やら破壊主義の冊子のやうに思はれますが、然し決して爾んなものではありません、「無教会」は教会の無い者の教会であります、即ち家の無い者の合宿所とも云ふべきものであります、即ち心霊上の養育院か孤児院のやうなものであります、「無教会」の無の字は「ナイ」と訓むべきものでありまして、「無にする」とか「無視する」とふ意味ではありません」（内村鑑三、1901、71。なお、引用はルビを省略）

無教会は、近代日本キリスト教における重要な研究テーマであり、これまで多くの研究がなされてきた。また無教会の起点にたつ内村鑑三は、近代日本キリスト教の文脈を超えて、近代日本自体を批判的に理解しようとする際に、欠くことのできない思想家であり、これは内村研究の広がりが示す通りである（鈴木範久監修、藤田豊編『内村鑑三著作・研究目録』教文館、2003 年、など参照）。わたくしも、大学の演習で無教会キリスト教をしばしば取り上げ、2013 年度は内村鑑三の非戦論関連の文献を読んでいる。しかし、わたくし自身は、専門の無教会研究者というわけではなく、本稿も専門論文というよりも、一つの試論あるいは研究ノートと言うべきものである。

無教会はキリスト教史、特に近代キリスト教史の中にどのように位置づけることができるか、無教会キリスト教の動向から、どのような近代以降におけるキリスト教の可能性を読み解くことができるか。これが本稿のテーマである。内村鑑三と無教会については、最近も次々と新しい研究が刊行されていることからもわかるように、無教会とは何かという問いは、すでに解決済みのものではなく、いまだ係争中の問題であると言わねばならない。なぜなら、内村とその弟子たちが追及したキリスト教を近代日本に伝道するという課題は続く世代への継承を求めつつ、現在、進行中だからである。すなわち、キリスト教史における無教会についての理解は、キリスト教自体にとって、過去の問いであると同時に、現在から未来への可能性に関わるものであって、ここに無教会を問う意義が存在するように思われる。

本稿は、次の順序で進められる。まず、キリスト教史、特に近代キリスト教史における無教会の位置を、トレルチらの類型論を参照しつつ論じ、無教会のダイナミズムの概略を検討する。次に、無教会のダイナミズムを、その活動様式あるいは内村と弟子との関わりを通して、より立ち入って論じてみたい。そして最後に、無教会との関わりでキリスト教の未来を展望しつつ、本稿を結びたい。なお、参考文献は、本稿の以下の議論において参照される順序で本稿の末尾にまとめることにする。

二　キリスト教史と無教会
三　無教会のダイナミズム
四　むすび

文献

１．内村鑑三「無教会論」1901 年（『内村鑑三全集９』岩波書店、1981 年、71-73 頁）。
２.赤江達也『「紙上の教会」と日本近代――無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店、2013 年。
３．Ernst Troeltsch, *Gesammelte Schriften 1. Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*（1912）, Scientia Verlag, 1977.
４．森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社、1972 年。
５．近藤勝彦『トレルチ研究　上』教文館、1996 年。
６．古屋安雄「内村鑑三の無教会」（古屋安雄『日本のキリスト教』教文館、2003 年、80-112 頁）。